

## [AW] 学会賞受賞講演

第2日目 (2021年7月8日(木)) 11:20~12:00

第1会場 | 国立京都国際会館 1階 Main Hall

司会：北川 雄光 (慶應義塾大学医学部外科学) 司会：大段 秀樹 (広島大学大学院医系科学研究科消化器・移植外科学)

### AW-1

#### JSGS Art of the Year 2021(手術部門)

若林 剛:1

(1:上尾中央総合病院 外科)

初めて腹腔鏡下肝切除を施行したのは1995年7月で、これは大腸癌で腹腔鏡下結腸切除を受けたオペラ歌手が、自らの歌手活動にとり腹腔鏡下手術が有益であることを知り、肝転移巣の切除も腹腔鏡下で行なって欲しいという強い希望により実現した。この第一例目は腹腔鏡下肝切除に関する深い洞察に繋がり、翌年の世界内視鏡外科学会ビデオオリンピックでの金メダル受賞と故北島政樹教授の温かい後押しにより、この術式の継続と標準化が行われた。腹腔鏡下手術による動作制限を克服する目的で、2001年7月にロボット支援下肝部分切除を、そして2003年6月にロボット支援下肝外側区域切除を世界に先駆けて施行した。しかし、吻合操作のない肝切除にはロボット支援手術はあまり有用でないと考えた。2004年2月には生体肝移植ドナー手術に対して、国内最初の腹腔鏡補助下ドナー肝外側区域切除を行なった。この術式は肝臓癌に対する腹腔鏡補助下大肝切除の経験を積むことにより、完全腹腔鏡下ドナー肝葉切除へと発展し、気腹下の肝実質離断では出血が減少することを臨床例で初めて示した。腹腔鏡下ドナー肝切除を慎重に施行していくなかで、腹腔鏡下肝切除が良好な視野と気腹による出血量減少のため理論的に開腹肝切除より優れていると考えた。この考えを共有すべく2014年10月に第2回腹腔鏡下肝切除の国際コンセンサス会議を開催した。その後、肝細胞癌と大腸癌肝転移に対する腹腔鏡下肝切除の開腹肝切除に比較した短期成績での優位性と長期成績での同等性を、全国の大規模データを利用した傾向スコア解析で示すことができた。最初は患者の熱意で開始した腹腔鏡下肝切除だったが、徐々に術式を定型化し症例を重ねるうちに、開腹肝切除に対する優位性を確信した。エビデンスは後に示されたが、外科医としての直感は正しく、患者が望む肝切除として現在の普及に至ったと考えている。今後は蛍光染色を利用した腹腔鏡下肝実質温存解剖学的肝切除の標準化と長期成績の提示、2021年2月に開催されたコンセンサス会議「Precision Anatomy for Hepato-Biliary-Pancreatic Surgery」の成果をふまえ、高難度腹腔鏡下肝切除の世界への普及を目指したい。